

二国間交流事業 共同研究報告書

令和5年4月15日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

名古屋大学・人文学研究科

[職・氏名]

教授・加藤久美子

[課題番号]

JPJSBP 120192002

1. 事業名 相手国: オーストリア (振興会対応機関: FWF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) メコン川上流地域における宗教・経済・ジェンダー：人類学的・歴史学的視点から(英文) Religion, Economy and Gender in the Upper Mekong Region: Anthropological and Historical Perspectives3. 共同研究実施期間 2019年 7月 1日 ~2023年 3月 31日 (3年 9ヶ月)【延長前】 2019年 7月 1日 ~2021年 6月30日 (2年 0ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Institute for Social Anthropology, Austrian Academy of Sciences・
Scientific Employee (Postdoctoral Researcher)・Roger Casas Ruiz

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		4,670,086 円
内訳	1年度目執行経費	2,254,286 円
	2年度目執行経費	2,245,800 円
	3年度目執行経費	170,000 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	4名
相手国側参加者等	1名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	4		()
2年度目			()
3年度目			()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

本研究の研究交流の主要な目的は、中国雲南省から東南アジア大陸部北部にかけてのメコン川流域を研究対象とする、オーストリア側・日本側双方の人類学者・歴史学者が集まって、共同で研究をおこなうことであった。研究交流の方法としては、研究会・研究発表とフィールドワークの両方をおこなうことを計画していたが、新型コロナウイルスの感染拡大とその防止政策により、フィールドワークは実現できなかった。一方、オーストリア側・日本側双方の研究者が参加する研究会については、対面では 2019 年度にオーストリアで開くことができ、オンラインでは 2021 年度に開催した。また、2022 年度には、第 14 回国際タイ研究会議(オンライン)において、本共同研究の日本側・オーストリア側メンバーでパネルをつくり、研究成果を発表した。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本研究の最中に起こった新型コロナウイルスの世界的流行により、フィールドワークの実現には大きな制約が課されたが、そのことがかえって国境や越境移動の持つ意味、移動手段の変化やそのそれぞれの性質についての議論を深める契機となった。メコン川流域においては、人流制限によってウイルスを統御しようとする物理的な壁の建設が行われ、日常的な国境の往来が制限される一方、高速鉄道の建設が進み、鉄道では容易に国境を越えられるという変化が起こっている。この移動のあり方の大きな変化は、国境を越えたコミュニケーションや宗教的・経済的活動に大きな影響を与えていることが予想される。本研究交流によって、こういった新たな事態を分析する際の歴史的視点、人類学的視点の重要性が再確認された。本共同研究ではフィールドワークを実施できなかったが、移動とその制約から当該地域をとらえる新たな視座を得ることができた。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

オーストリアでのワークショップを通じて、ヨーロッパにおける東南アジア研究者の動向を知ることができ、それを通じて知見を深め、新たな共同研究の道がひらけた。特に、現代的なタイ族女性商人の越境移動の研究をしているオーストリア側の若手研究者と、1950 年代のタイ族商人の越境移動の研究をしてきた日本側の歴史研究者との交流は、広い時間軸から商人の越境移動の意味合いを比較研究する新しい可能性を開いた。また、メコン川上流域の山地民研究でしばしば論じられる逃避文化(ゾミア)に関する議論を、平地民研究者と議論しなおすことで、山地民に特有の現象とそうではない現象について再考する重要な機会となった。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

新型コロナウイルスの蔓延とそれに伴う行動制限に関わる諸問題の克服と解決に向けて、多くの議論を行った。国際タイ研究会議での研究発表を通して、メコン川上流域で新たに起こっている移動規制と移動促進のふたつの相矛盾した状況について報告し、歴史的事件も参照軸としつつ、どのような社会変化が予期できるか問題提起を行った。大きな社会的貢献にはまだ至っていないが、諸問題の提起の萌芽の状態である。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本研究の日本側研究者は、代表者を除いてすべて若手研究者であり、本研究での外国の研究者との交流や国際会議での英語での研究発表などの経験を通して、国際的に活躍できる研究者としての資質をさらに高めることができた。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どの様な発展の可能性が認められるか)

本共同研究のメンバーを執筆者とする、英文の学術雑誌の特集号企画を立てているほか、さらに他の関係研究者に声をかけて、メコン川上流域の境界と移動に関する本を出版する計画を立てている。共同研究の期間中に実施できなかった中国雲南省でのフィールドワークを2023年夏に実施する計画も立ち上がり、当該地域の理解に向けた若手の研究交流や活発な議論が進みつつある。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

なし